伝統の架け橋
～今・昔・そして未来～

私たちが作りました

野村美貴（小名浜東小５年）
海野昊（郡山ザベリオ学園小５年）
加藤寿奈（原町一小６年）
駒木根璃乃（石川義塾中２年）
庄條のり（会津学鳳高１年）
五十嵐慧和（葵高２年）

つなごう 請戸の田植踊

震災前に奉納された請戸の田植踊を動画で説明する横山さん

住民に支えられ後世へ

浪江町請戸地区に伝わる「請戸の田植踊」は東日本大震災や、東京電力福島第一原発事故の後も、途絶えることなく続けられている。それは、請戸地区を古里にする多くの人々の熱意があったから。請戸の田植踊は地区の鎮守様の苕野（くさの）神社の「安波祭」で奉納されている。苕野神社は津波で流失したが、今年２月に再建された。原発事故の影響で古里に住めない請戸地区の人々にとって田植踊と苕野神社は心の支え。生活の場所が遠く離れても、古里につながる架け橋となっている。

苕野神社

苕野神社は漁船や漁師の安全を守る神社だ。この神社は７１５年に創建され、約１３００年の歴史を持つ。昔は苕野小島という島にあったが、島が崩壊し、現在地に移った。震災の津波で社殿が流され、当時の宮司さんの家族は亡くなった。地元の神社、祖先が守ってきた神社を再建させたいという強い意志を持った人たちが多くいたため、今年２月に再建された。新しい神社は、参道が半分、境内が３分の１になった。しかし、多くの人が参拝に訪れている。

再建された苕野神社

請戸の田植踊

請戸の田植踊は浪江町請戸地区に江戸時代末期から続く民俗芸能だ。安波祭は毎年２月第３日曜日に行われ、豊作、豊漁、海上安全を祈って田植踊を奉納している。田植踊は「早乙女」７人、「才蔵」７人、「中打ち」２人の構成で踊る。震災前には請戸小の４～６年生で希望した子どもたちが踊ってきたが、震災によって、あの日以来、みんな散り散りばらばらになってしまい、請戸小の子どもたちだけでつなぐのは難しくなったため、年齢、地域を問わず参加出来るようにした。

衣装も津波で流されたが、多くの人の支援でそろえることができた。

震災から１年間は肩に黒いリボン（喪章）をつけて供養の心で踊った。

絶やせない思い

震災が起きると請戸の田植踊の踊り手は避難のため全国に散らばり、田植踊を踊ることが困難になった。田植踊を継承している請戸芸能保存会会長の佐々木繋子さん（74）は、江戸時代から続く伝統を絶やしたくないという気持ちを抱き、震災前から踊っていた子どもたちに手紙を書いた。13人から「また踊りたい」と返事がきた。震災犠牲者への供養と考え、２０１１年８月にアクアマリンふくしまで行われた復興公演で請戸の田植踊を披露した。

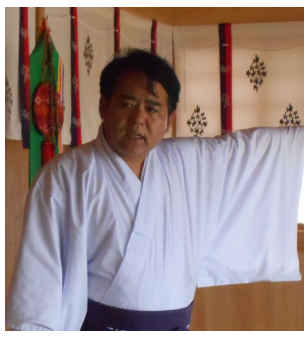
小学４年から田植踊の踊り手を務め、東日本大震災・原子力災害伝承館に勤務している横山和佳奈さん（26）は、最初は友達に会いたいという気持ちから参加した。今はメンバーが入れ替わり、震災前から踊っている人はほとんどいないが、踊りを絶やしたくないと思って続けている。

苕野神社の宮司をしていた方が震災によって亡くなり、その後苕野神社の宮司となった田村貴正さん（50）。田村さんは請戸の田植踊と苕野神社は切っても切り離せない関係だといい、「歴史と伝統は５年10年でできるものではない。ご先祖様が必死に守って後世に伝えたいと思ったから、今がある。私たちも次の世代にバトンタッチしたい」と熱く語った。

オンラインで請戸の田植踊を説明する佐々木さん

保存会会長の佐々木さんは「踊ることで亡くなった方たちの供養になる」という知人の一言で、踊りを継承していく決意をしたという。震災前は小学生に踊りを教えるのは大変で、いやになったこともあったそうだ。しかし、震災を経て、「今までなんとなく継承してきた請戸の田植踊が他にはない伝統だということに気づいた」と振り返った。

約15年、請戸の田植踊を続けているという踊り手の横山さん。震災当時横山さんは請戸に住んでいて、家は流されてしまった。その後、福島県内で避難生活を送るが、踊り手は現在までずっと続けてきた。「この踊りは昔から請戸にあって今もあり続けているもの。何もかもなくなってしまった中で唯一請戸に残ってくれたもの。避難した私にとっては自分と請戸をつなぐもの」と優しいまなざしで話した。３人は何度も請戸の田植踊の再興を支えた人々への感謝を述べ、「これからも安波祭、請戸の田植踊が続いてほしい」と将来を見据えた。



苕野神社の歴史などを説明する田村さん

編集後記

後継者不足問題。解決するためには、「伝統文化　芸能」を発信し続けていくことが大切だと考える。住民の「途絶えさせないで」という声や「他にはない伝統」という誇りだけでは、人々の中に残し続けることは不可能に等しいだろう。情報社会といわれる現代ではネットを有効活用できなければ命取りになる。そのため、今ある継承され続けた伝統を私たちは積極的に公開し、誰もが知り、親しめるような機会を設けていくことが重要になる。その伝統や楽しさを理解してもらうことで、維持や継承の意識形成につなげていけるのだ。魅力を発信し次世代への担い手を確保していくサイクルを作っていくことが必要になると考える。

（五十嵐　慧和）